

# 銀座

永井荷風

青空文庫



この一、二年何のかのと銀座ぎんざ界限かいがいを通る事が多くなつた。知らず知らず自分は銀座近辺の種々なる方面の観察者になつていたのである。

唯ただ不幸にして自分は現代の政治家と交まじらなかつたためまだ一度もあの貸座敷然たる松まつ本楼ほんろうに登る機会がなかつたが、しかし交際と称する浮世の義理は自分にも炎天にフロッツ

クオオトをつけさせ帝国ホテルや精養軒や交詢社こうじゆんしゃの階段を昇降させた。有楽座帝国

劇場歌舞伎座などを見物した帰りには必ず銀座のビヤホールに休んで最終の電車のなくなるのも構わず同じ見物帰りの友達と端はてしもなく劇評を戦わすのであつた。上野の音楽学

校に開かれる演奏会の切符を売る西洋の楽器店は、二軒とも人の知っている通り銀座通りにある。新しい美術品の展覧場てんらんじやう「吾楽」というものが建築されたのは八官町はちかんちやうの通

りである。雑誌『三田文学』を発売する書肆しよしは築地つぎじの本願寺ほんがんじに近い処にある。華美な浴衣かたを着た女たちが大勢、殊に夜の十二時近くなつてから、草花を買いに出るお地藏じぞうさまの縁えん日にちは三十間堀さんじっけんぼりの河岸通かしどおりにある。

逢うごとにいつもその悠然たる貴族的態度の美と洗練された江戸風の性行とが、そぞろに蔵前くらまえの旦那衆を想像せしむる我が敬愛する下町したまちの俳人某なにがし子の邸宅は、団十だんじゆう

郎の旧宅とその広大なる庭園を隣り合せにしている。高い土塀と深い植込とに電車の響も自ずと遠い嵐のように軟げられてしまうこの家の茶室に、自分は折曲げて坐る足の痛さをも厭わず、幾度か湯のたぎる茶釜の調を聞きながら礼儀のない現代に対する反感を休めさせた。

建込んだ表通りの人家に遮ぎられて、すぐ真向に立っている彼の高い本願寺の屋根さえ、何処にあるのか分らぬような静なこの辺の裏通には、正しい人たちの決して案内知らぬ横町が幾筋もある。こういう横町の二階の欄干から、自分は或る雨上りの夏の夜に通り過る新内を呼び止めて酔月情話を語らせて喜んだ事がある。また梅が散る春寒の昼過ぎ、摺硝子の障子を閉めきつた座敷の中は黄昏のように薄暗く、老妓ばかりが寄集つた一中節のさらいの会に、自分は光沢のない古びた音調に、ともすれば疲れがちなる哀傷を味つた事もあつた。

しかしまた自分の不幸なるコスモポリチズムは、自分をしてそのヴェランダの外なる植込の間から、水蒸気の多い暖な冬の夜などは、夜の水と夜の月島と夜の船の影とが殊更美しく見えるメトロポオル・ホテルの食堂をも忘れさせない。世界の如何なる片隅をも我が家のように楽しく談笑している外国人の中に交つて、自分ばかりは唯独り心淋しく傾ける

キアンチのひとびん一壇ひとびんに年を追うて漸く消えかかる遠い国の思出を呼び戻す事もあつた。

銀座界限には何という事なく凡すべての新しいものと古いものがある。一国の首都がその権勢ぶつぎと富貴おのずとに自おのずから蒐しゅうしゅう集しゅうする凡すべての物は、皆ここに陳列せられてある。われわれは新しい流行の帽子を買うためにも、遠い国から来た葡萄酒を買うためにも、無論この銀座へ来ねばならぬが、それと同時に、有楽座などで聞く事を好まない「昔」の歌をば、なりたけ「昔」らしい周囲うちの中に聞き味おうとすればやはりこの辺へんの特種な限られた場所を択あばなければならぬ。

自分は折々てんがどう天下堂てんがどうの三階の屋根裏あがに上つて都会の眺望を楽しんだ。山崎洋服店の裁縫師ちようかんずでもなく、天てん賞堂しょうどうの店員たのしでもないわれわれが、銀座界限の鳥瞰ちようかんず図たのしを楽しもうとすれば、この天下堂てんがどうの梯子はしごだん段あがを上るのが一番軽けいべん便べんな手段である。茲ここまで高く上つて見ると、東京の市街も下にいて見るほどに汚らしくはない。十月頃の晴れた空の下したに一望つく尽る処なき瓦屋根の海を見れば、やたらに突立っている電柱の丸太の浅間あきしさに呆あきれながら、とにかく東京は大きな都会であるという事を感じ得るのである。

人家の屋根の上をば山手線やまのてせんの電車が通る。それを越して霞ヶ関かすみせき、日比谷ひびや、丸の内まるのうちを見

晴す景色と、芝公園の森に対して品川湾の一部と、また眼の下なる汐留の堀割から引続いて、お浜御殿の深い木立と城門の白壁を望む景色とは、季節や時間の工合によつては、随分見飽きないほどに美しい事がある。

遠くの眺望から眼を転じて、直ぐ真下の街を見下すと、銀座の表通りと並行して、幾筋かの裏町は高さの揃った屋根と屋根との間を真直に貫き走っている。どの家にも必ず付いている物干台が、小さな菓子折でも並べたように見え、干してある赤い布や並べた鉢物の緑りが、光線の軟な薄曇の昼過ぎなどには、汚れた屋根と壁との間に驚くほど鮮かな色彩を輝かす。物干台から家の中に這入るべき窓の障子が開いている折には、自分は自由に二階の座敷では人が何をしているかを見透す。女が肩肌抜きで化粧をしている様やら、狭い勝手口の溝板の上で行水を使っていくさままでを、すつかり見下してしまう事がある。尤も日本の女が外から見える処で行水をつかうのは、『阿菊さん』の著者を驚喜せしめた大事件であるが、これはわざわざ天下堂の屋根裏に登らずとも、自分は山の手の垣根道で度々出遇つてびつくりしているのである。この事を進めていえば、これまで種々なる方面の人から論じ出された日本の家屋と国民性の問題を繰返すに過ぎまい。

われわれの生活は遠からず西洋のように、殊に亜米利加の都会のように変化するものた

る事は誰が眼にも直ちに想像される事である。然らばこの問題を逆にして試に東京の外観が遠からずして全く改革された暁には、如何なる方面、如何なる隠れた処に、旧日本の旧態が残されるかを想像して見るのも、皮肉な観察者には興味のないことではあるまい。実例は帝国劇場の建築だけが純西洋風に出来上りながら、いつの間にかその大理石の柱のかげには旧芝居の名残りなる簷屋だの飲食店などが発生繁殖して、遂に厳肅なる劇場の体面を保たせないようにしてしまつた。銀座の商店の改良と銀座の街の敷石とは、将来如何なる進化の道によつて、浴衣に兵児帯をしめた夕涼の人の姿と、唐傘に高足駄を穿いた通行人との調和を取るに至るであらうか。交詢社の広間に行くと、希臘風の人物を描いた「神の森」の壁画の下に、五ツ紋の紳士や替り地のフロックコオトを着た紳士が幾組となく対座して、囲碁仙集をやつてゐる。高い金箔の天井にパチリパチリと響き渡る碁石の音は、廊下を隔てた向うの室から聞えて来る玉突のキュウの音に交わる。初めてこの光景に接した時自分は無論いふべからざる奇異なる感に打たれた。そしてこの奇異なる感は、如何なる理由によつて呼起されたかを深く考え味わねばならなかつた。数寄を凝した純江戸式の料理屋の小座敷には、活版屋の仕事場と同じように白い笠のついた電燈が天井からぶらさがつてゐるばかりか遂には電気仕掛けの扇風器までが輸入された。

要するに現代の生活においては凡ての固有純粹なるものは、東西の差別なく、互に噛み合  
い壊し合っているのである。異人種間の混血児は特別なる注意の下に養育されない限り、  
その性情は概して兩人種の欠点のみを遺伝するものだというが、日本現代の生活は正しく  
かくの如きものであらう。

銀座界限はいうまでもなく日本中で最もハイカラな場所であるが、しかしここに一層皮  
肉な贅沢屋があつて、もし西洋そのままの西洋料理を味おうとしたなら銀座界限の如何な  
る西洋料理屋もその目的には不適當なる事を発見するであらう。銀座の文明と横浜のホテ  
ルとの間には歴然たる区別がある。そして横浜と印度の殖民地と西洋との間にはまた梯  
子昇りに階段がついている。

ここにおいて、或る人は、帝国ホテルの西洋料理よりもむしろ露店の立ち喰いにトンカ  
ツの噀をかぎたいといった。露店で食う豚の肉の油揚げは、既に西洋趣味を脱却して、し  
かも従来の天麩羅と牴触する事なく、更に別種の新しきものになり得ているからだ。  
カステラや鴨南蛮が長崎を経て内地に進み入り、遂に渾然たる日本のものになつた  
と同一の実例であらう。

自分はいつも人力車と牛鍋とを、明治時代が西洋から輸入して作ったものの中で

一番成功したものと信じている。敢て時間の経過が今日の吾人をして人力車と牛鍋とに反感を抱かしめないのでは決してない。牛鍋の妙味は「鍋」という従来の古い形式の中に「牛肉」という新しい内容を収めさせた処にある。人力車は玩具のようおもちゃに小さく、何処となく滑稽な形をなし最初から日本の生活に適当し調和するように発明されたものである。この二つはそのままの輸入でもなく無意味な模倣でもない。少くとも発明という賛辞に値するだけに発明者の苦心と創造力とが現われている。即ち国民性を通過して然る後に現れたものである。

こういう点から見て、自分は維新前後における西洋文明の輸入には、甚だ敬服すべきものが多いように思っている。徳川幕府が仏蘭西の士官を招聘して練習させた歩兵の服装——陣笠じんがさに筒袖つつそでの打割羽織ぶつさきばおり、それに昔のままの大小をさした服装いでたちは、純粹の洋服となった今日の軍服よりも、胴が長く足の曲った日本人には遙かに能く適当よしていた。洋装の軍服を着れば如何なる名将といえども、威儀風采において日本人は到底西洋の下士官ソフにも肩を比する事は出来ない。異つた人種はよろしく、その容貌体格習慣挙動の凡てを鑑みて、一様には論じられない特種かんがのものを造り出すだけの苦心と勇氣とを要する。自分うえのは上野の戦争の絵を見る度たびに、官軍の冠かむつた紅白の毛甲けかぶとを美しいものだと思ひ、そし

てナポレオン帝政当時の胸甲騎兵の甲を連想する。

銀座の表通りを去つて、いわゆる金春の横町を歩み、両側ともに今では古びて薄暗くなつた煉瓦造りの長屋を見ると、自分はやはり明治初年における西洋文明輸入の當時を懐しく思返すのである。説明するまでもなく金春の煉瓦造りは、土蔵のように壁塗りになつていて、赤い煉瓦の生地を露出させてはいない。家の軒はいずれも長く突き出で円柱に支えられている。今日ではこのアアチの下をば無用の空地にして置くだけの余裕がなくつて、戸々勝手にこれを改造しあるいは破壊してしまつた。しかし当初この煉瓦造を經營した建築者の理想は家並みの高さを一致させた上に、家ごとの軒の半円形と円柱との列によつて、丁度りボリの街路を見るように、美しいアルカアドの眺めを作らせるつもりであつたに違いない。二、三十年前の風流才子は南国風なあの石の柱と軒の弓形とがその蔭なる江戸生粋の格子戸と御神燈とに対して、如何に不思議な新しい調和を作り出したかを必ず知つていた事であろう。

明治の初年は一方において西洋文明を丁寧輸入し綺麗に模倣し正直に工風を凝した時代である。と同時に、一方においては、徳川幕府の圧迫を脱した江戸芸術の残りの花が、

目覚しくも一時に二度目の春を見せた時代である。劇壇において芝翫、彦三郎、田之助の名を挙げ得ると共に文学には黙阿弥、魯文、柳北の如き才人が現れ、画界には暁齋や芳年の名が轟き渡つた。境川や陣幕の如き相撲はその後には一人もない。円朝の後に円朝は出なかつた。吉原は大江戸の昔よりも更に一層の繁栄を極め、金瓶大黒の三名妓の噂が一世の語り草となつた位である。

両国橋には不朽なる浮世絵の背景がある。柳橋は動しがたい伝説の權威を背負つてゐる。それに対して自分は艶かしい意味においてしん橋の名を思出す時には、いつも明治の初年返咲きした第二の江戸を追想せねばならぬ。無論、実際よりもなお麗しくなお立派なものにして憬慕するのである。

現代の日本ほど時間の早く経過する国が世界中にあらうか。今過ぎ去つたばかりの昨日の事をも全く異つた時代のように回想しなければならぬ事が沢山にある。有楽座を日本唯一の新しい西洋式の劇場として眺めたのも僅に二、三年間の事に過ぎなかつた。われわれが新橋の停車場を別れの場所、出発の場所として描写するのも、また僅々四、五年間の事であらう。

今では日吉町ひよしちようにプランタンが出来たし、尾張町おわりちようの角かどにはカフェエ・ギンザが出来かかっている。また若い文学者間には有名なメイゾン・コオノスが小網町こあみちようの河岸通りかしどおを去って、銀座附近に出て来るのも近い中うちだとかいう噂がある。しかしそういう適当な休み場所がまだ出来なかつた去年頃まで、自分は友達を待ち合わしたり、あるいは散歩の疲れた足を休めたり、または単に往來ゆききの人の混雑を眺めるためには、新橋停車場内の待合所えらを拵えらぶがよいと思つていた。

その頃には銀座界限には、已にカフェエや喫茶店やビヤホールや新聞縦覧所などという名前をつけた飲食店は幾軒もあつた。けれども、それらはいずれも自分の目的には適しない。一時間ばかりも足を休めて友達とゆっくり話をしようとするには、これまでの習慣で、非常に多く物を食わねばならぬ。ビール一杯が長くて十五分間、その店のお客たる資格を作るものとすれば、一時間に対して飲めない口にもなお四杯まんの満まんを引かねばならない。然らずば何となく気が急せいて、出て行けがしにされるような僻ひがみが起つて、どうしても長く腰を落ち付けている事が出来ない。

これに反して停車場内の待合所は、最も自由で最も居心地よく、聊いささかの気兼ねきがもいらぬい無類上等の〔Cafe〕《カフェエ》である。耳の遠い髪の臭い薄ぼんやりした女おんなボーイ

に、義理一遍のビールや紅茶を命ずる面倒もなく、一円札に対する剩錢つりせんを五分もかかつて持て来るのに気をいら立てる必要もなく、這入りはいたい時に勝手に這入って、出たい時には勝手に出られる。自分は山の手の書齋の沈静した空気が、時には余りに切なく自分に対して、休まずに勉強しろ、早く立派なものを書け、むつかしい本を読めというように、心を鞭打つ如く感じさせる折には、なりたけ読みやすい本を手にして、この待合所の大きな皮張の椅子いすに腰をかけるのであった。冬には暖い火が焚たいてある。夜は明い燈火ともしびが輝いている。そしてこの広い一室なの中にはあらゆる階級の男女が、時としてはその波瀾ある生涯の一端を傍観させてくれる事すらある。Henri 《アンリイ》 Bordeaux 《ボルドオ》 という人の或る旅行記の序文に、手荷物を停車場に預けて置いたまま、汽車の汽笛の聞える附近の宿屋に寝泊りして、毎日の食事さえも停車場内の料理屋で準えとこの、何時なんどきにても直すぐさ様出発し得られるような境遇に身を置きながら、一向に巴里パリを離れず、かえって旅人のような心持で巴里の町々を彷徨ほうこうしている男の話が書いてある。新橋の待合所にぼんやり腰をかけて、急いそがしそうな下駄の響と鋭い汽笛の声を聞いていると、いながらにして旅に出たような、自由な淋しい好い心持がする。上田敏先生うえただびんもいつぞや上京された時自分に向つて、京都の住すまいもいわば旅である。東京の宿も今では旅である。こうして歩いているの

は好い心持だといわれた事がある。

自分は動いている生活の物音の中に、淋しい心持を漂ただよわせるため、停車場の待合室に腰をかける機会の多い事を望んでいる。何のために茲ここに来るのかと駅夫に訊問された時の用意にと自分は見送りの入場券か品川行の切符を無益に買い込む事を辞さないのである。

再びいう日本の十年間は西洋の一世紀にも相当する。三十間堀の河岸かじどおり通には昔の船宿が二、三軒残っている。自分はそれらの家の広い店先の障子を見ると、母がまだ娘であった時分この辺へんから猿ざる若町わかちようの芝居見物に行くには、猪ちよきぶ牙船ねに重じゆうづ詰めの食事まで用意して、堀割から堀割をつたわって行つたとかいわれた話をば、いかにも遠い時代の夢物語のように思い返す。自分がそもそも最初に深川の方面へ出掛けて行つたのもやはりこの汐し留おどめの石橋いしばしの下から出発する小な石油ちいさの蒸汽船に乗つたのであるが、それすら今では既に消滅してしまつた時代の逸話となつた。

銀座と銀座の界限とはこれから先も一日一日と變つて行くであらう。丁度活動写真を見詰める子供のようみに、自分は休みなく變つて行く時勢の絵巻物をば眼いたくの痛いたくなるまで見詰めていたい。

明治四十四年七月



# 青空文庫情報

底本：「荷風隨筆集（上）」岩波文庫、岩波書店

1986（昭和61）年9月16日第1刷発行

2006（平成18）年11月6日第27刷発行

底本の親本：「荷風隨筆 一」岩波書店

1981（昭和56）年11月17日第1刷発行

※底本は、物を数える際や地名などに用いる「ヶ」（区点番号5-86）を、大振りにつくっています。

入力：門田裕志

校正：阿部哲也

2010年4月15日作成

2019年12月12日修正

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫（<https://www.aozora.gr.jp/>）で作ら

れました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

# 銀座

永井荷風

2020年 7月18日 初版

## 奥 付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail [info@aozora.gr.jp](mailto:info@aozora.gr.jp)

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>  
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。  
<http://tokimi.sylphid.jp/>